

NRI学生小論文コンテスト2022

論文審査会



論文審査会

審査委員6名が集って議論を交わし、
最終審査会に進む上位入賞論文を選定しました



2022年11月15日、NRI東京本社会議室に審査委員6人が集まり、論文審査会を実施しました。論文応募者の性別・学校名・学年などの情報は全て伏せられたうえで議論は行われ、その結果、上位入賞論文9作品（大学生の部4、高校生の部5）を選定しました。P.54～62の「論文審査会レポート」で、上位入賞論文9作品に対する審査委員のコメントの一部を紹介します。各賞については、2022年12月19日の最終審査会におけるプレゼンテーション審査を経て、決定します。

[論文審査会に至る経緯]

- 一次審査：NRIグループ社員延べ100名超が論文を評価し、評価の高かった18論文（大学生の部8、高校生の部10）が二次審査へ。
- 二次審査：審査委員長でNRI研究理事の桑津浩太郎をはじめとする社内審査委員に加え、特別審査委員の池上彰さん、最相葉月さんを含む6人の審査委員それぞれが18論文を評価・採点。

[論文審査会 審査委員]

審査委員長

桑津 浩太郎 NRI研究理事

特別審査委員

池上 彰 ジャーナリスト、名城大学教授、東京工業大学特命教授

最相 葉月 ノンフィクションライター

審査委員

齊藤 義明 NRI未来創発センター 2030年研究室長

八代 夕紀子 NRI OpenStandia事業部長

伊吹 英子 NRIサステナビリティ推進室長



ITの利用で「誰一人」取り残さない医療を目指して

提案内容

医療の高度化・細分化が進み、患者本人の精神状態が置き去りにされているという問題に対し、「誰一人」取り残さない社会を実現するためにITを利用し、患者の日記から感情を分析してデジタルアートで表現する自作アプリ「AURA」を提案。

審査委員のコメント

医学生としての深い課題認識と、強い意志・行動力

池上—医療の専門化が進み過ぎ、肝心の患者への視座が薄れるという問題点を独自に解決しようとする意欲を高く評価しました。コンテキストのテーマ詳細文に違和感を持って問題解決を考える批判的精神にも、好感を持ちました。



いく可能性があり、期待が持てます。



八代—医学生の正直な気持ちの吐露から始まり、医療の現状の課題が主観・客観両面から語られているので、非常に説得力があります。AURAが表現するものは数字ベースの採点表イメージかと思えばデジタルアートというのが驚きで、面白い。これぞ新しい世代の考えることだと感心しました。論文の終わりが「…社会にしたい」となっており、他力本願ではなくあくまで自分がやれるのだという強い意志を感じます。

最相—現状の深い考察と問題の把握、目の前の一人を助けるために自分ができるところを実際にやっている行動力が素晴らしいと思います。単に日記をもとに感情を評価するだけでなく、アートでどのように表されるのか、プレゼンで拝見してみたいです。一目で見てわかるという意味では、もしかしたら現場の医師たちにも使いやすいものになって



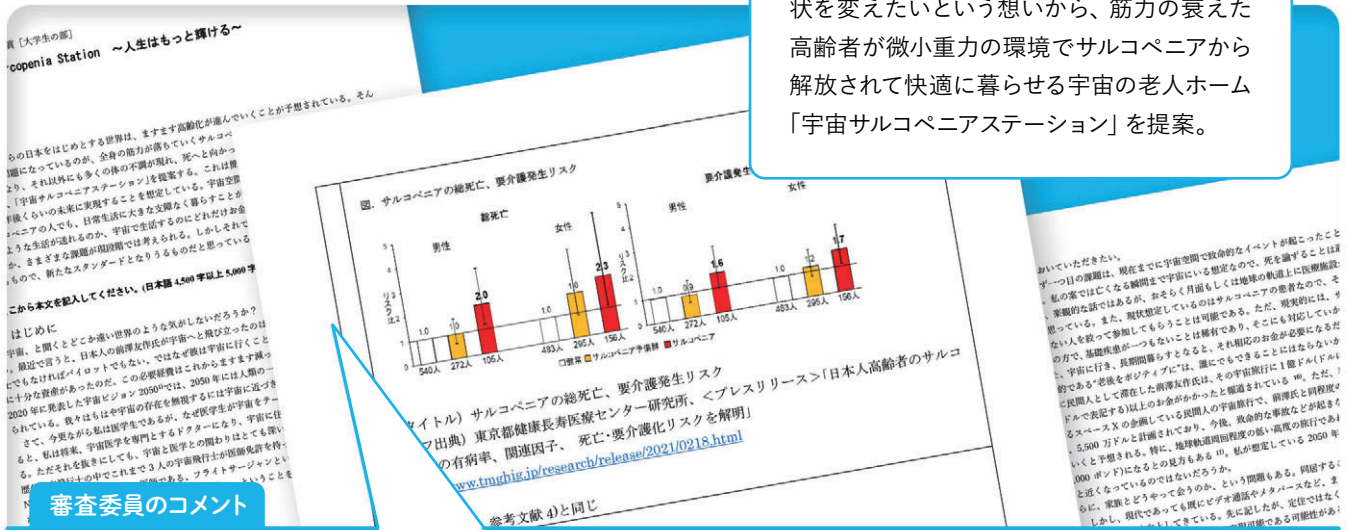
一次審査委員のコメント

- 非常に読みやすく分かりやすい解説で、問題点と解決策が明確であり実現できそうなレベルになっている点が良かった。医療現場の実態を実体験しているという強みを最大限に活かしている論文。ぜひ患者の立場に立てる医師になって欲しい。
- 医療分野での課題背景が分かりやすく示され、それに対する解決アプローチも興味深い。ぜひ実現してもらいたい。
- 解決策として、あえてメンタルの状況を色・デザインというアートで表現するほうが患者にとってなじみやすいという主張はユニーク。昨今のSNS文化を鑑みるに、日記形式で自分の気持ちを表現するのは古くて新しい手法なのかもしれない。
- 身近な医療の課題について課題認識を持ち、実際にサービスのプロトタイプ作成まで行った行動力に脱帽する。

Space Sarcopenia Station ～人生はもっと輝ける～

提案内容

高齢化が進み、加齢により全身の筋力が落ちていく病態「サルコペニア」の人が増え、身体の不調を抱えながら不自由な老後を送る現状を変えたいという思いから、筋力の衰えた高齢者が微小重力の環境でサルコペニアから解放されて快適に暮らせる宇宙の老人ホーム「宇宙サルコペニアステーション」を提案。



医学生として、描きたい2050年の未来社会を大胆に構想

最相—まず、NRIの一次審査委員の方がこの現実離れた提案をよく論文審査まで残してくださったと思います。宇宙葬はすでに実現しつつありますが、宇宙介護施設とは仰天のアイデア。誰が介護するのかなど気になる点もあり、賛否両論もあると思いますが、非常に興味深い未来予想です。コロナ禍では高齢者施設に入っている人は家族と面会もできない状況を見ると、宇宙に行ったとしても状況は同じだと思います。それに、スターウォーズや宇宙戦艦ヤマトなど、宇宙モノを見て育ってきたSF好きな世代が80代90



代になったとき、地球を見ながら老後の人生を送るのもいいなと思います。置かれた場所でどれだけ楽しく最後の時間を過ごせるかという意味で、こういう希望がポジティブに捉えられる側面もあると思います。これは考えつかなかったアイデアで、ぜひ最終審査で本人に会って話を聞いてみたいです。

齊藤—筋萎縮により日常動作が困難になった人々に、重力環境の最適化された宇宙環境で生活できる選択肢を与えるという極めてユニークなテーマ設定です。果たして高齢者などの筋萎縮の人が宇宙環境での生活を選択するのか、幸福なのかという点は疑問ですし、社会的な抵抗も考えられますが、とにかく非常に斬新な提案で、強く惹かれたため、高く評価しました。



一次審査委員のコメント



- 発想力に富んだ提案に心を掻き立てられた。一見、突拍子もない提案に思えるが、読み進めるとその背景や具体的アイデアが論理的に述べられており、筆者が日頃から宇宙領域に関心を持ち、関連する勉強に励んできた努力がうかがえる。
- 実現性は何とも言えないが、提起される問題が多岐にわたり、医学生というバックグラウンドが基点の発想。描きたい未来に対しては大胆なストレッチが必要で、まさに2050年を描

- くというテーマにふさわしい内容である。
- 夢のある提案で、さまざまな障壁はありつつも希望の持てる未来を描いている。
- 壮大な提案について丁寧に課題と対応策を述べている。老化による筋力低下という問題に対して、微小重力空間で再び生活に活気を戻そうとする前向きな姿勢が好印象だった。

ようこそ2050年グリーンシティへ ～緑の天国一日体験ツアー～



提案内容

2050年には現在の80億人から100億人に達すると予想される世界人口爆発や、地球温暖化により懸念される食糧不足問題を解決するために、高度化したバイオテクノロジーとAI技術を基盤としたスマート垂直農業による緑豊かな都市、「2050年のグリーンシティ」の構築を提案。

2050年という時間軸をしっかりと描き、未来予想図の具体的なイメージを提示

池上—具体的な未来像をSF風に描くことで、筆者の提案内容が具体的にイメージできました。



2050年という未来予想図を想像させてくれる作品だと思っています。

八代—「私が思い描いた2050年」で語られている具体的なイメージが非常に効果的で、一気に引き込まれました。ラストに登場するミライ市、バーゼル市の事例の使い方も効果的です。ファクトの使い方を見ても、非常に多岐にわたって情報収集したことがよく分かり、説得力のある仕上がりになっています。総じて構成が良く、読み易い論文でした。強いて言えばオリジナリティ・斬新さの点はもう一歩でしたが、論文審査に進んだ論文の中で、最も



伊吹—2050年という時間軸をしっかりと描いて未来予想図というものを提案していて、非常に興味深いと思いました。



一次審査委員のコメント

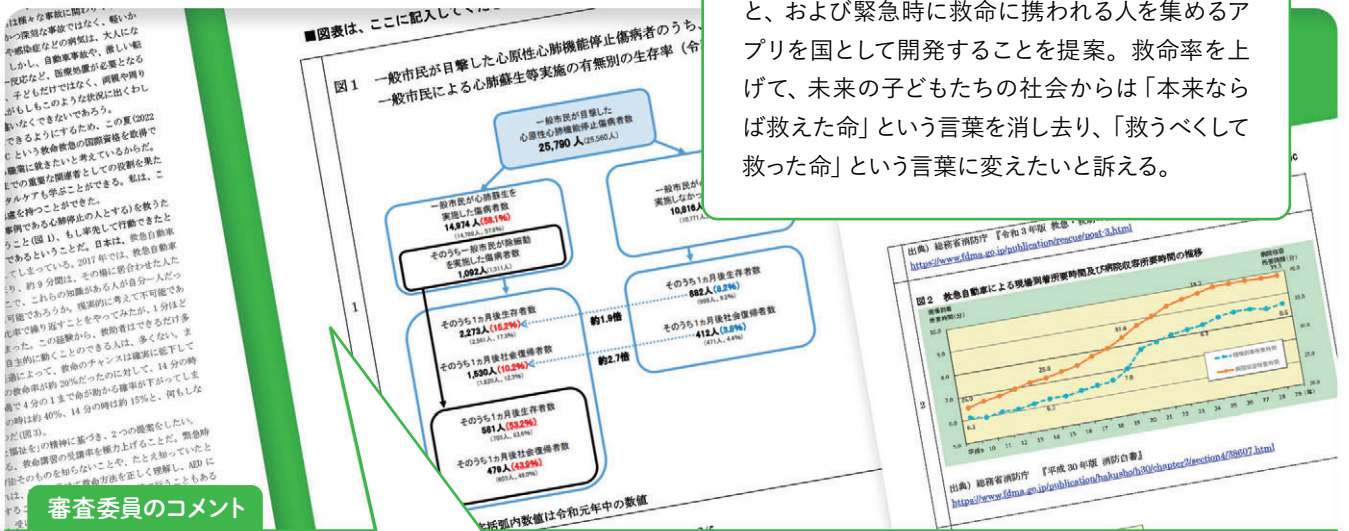
- 緑の天国一日体験ツアーということで、環境問題に対する解決の糸口がとても面白かった。論文自体も2050年のN氏の1日の過ごし方になって執筆されており、読み手に興味を持たせる構成になっている。
- 読んで「面白い」と思った小論文も珍しいのではないかな。参考文献をよく読み込んで、自分のものになっていると思う。惜

- しむらくは、自身の関わり方についてひと言でもあれば、なお良かった。
- 食糧不足に向けたグリーンシティの提案が斬新で、思いを説明できていたと思う。
- 日本国内にも壁面緑化の例があるが、農地として利用することで食糧問題の解決策にもなり得るという発想が面白い。

「救うべくして救った命」

提案内容

時代を創る子どもたちを不慮の事故から守りたいとの思いから、子どもの救命講習の資格を取得。その経験をもとに、救命講習の受講率を上げること、および緊急時に救命に携われる人を集めるアプリを国として開発することを提案。救命率を上げて、未来の子どもたちの社会からは「本来ならば救えた命」という言葉を消し去り、「救うべくして救った命」という言葉に変えたいと訴える。



審査委員のコメント

地域の人々の力をネットワークする画期的アイデア

最相—救命救急講習は、確かに修了しても使わなければ宝の持ち腐れで、いざというとき踏み出せないものです。そんな一般人をネットワークでつなぎ、臨機応変にチームを結成できるという意味で、非常に画期的なアイデアだと思いました。地域防災力を高めるのは消防団だけではないので、このアイデアはすぐにでも消防庁に提案してほしいと感じました。ただ、子どもについての論点が少ないので、もっと深められたら良かったと思います。



齊藤—救命講習の受講履歴がある人がアプリを導入し、半径300メートル以内で緊急事態が発生すると連絡が入るとい、救命救急におけるJ-ARARTの提案ですね。救急車到着平均時間8.6分間の間に、1名の救急者



が胸骨圧迫と人工呼吸を繰り返すのは体力的に限界があり、2名以上いれば助かる確率が上がるというシンプルだが重要な発見があり、アプリに含めるべき機能の考察も的確です。ただ、救命救急の講習を受ける人を増やす提案も合わせて提案して欲しかったと思いました。

伊吹—後を絶たない子どもの不慮の事故を少しでもなくしたいという強い想いが伝わってきました。未来に向けては時代を創る人が必要で、提案を実現することが「命」に対する概念そのものを変えることにつながるという想いから提起された提案です。社会の人々の力をうまく活用した解決策を提示している点、その思考のアプローチも、これからの時代の未来予想図を実現させる一定の道筋を示しているものと思い、高く評価しました。



一次審査委員のコメント

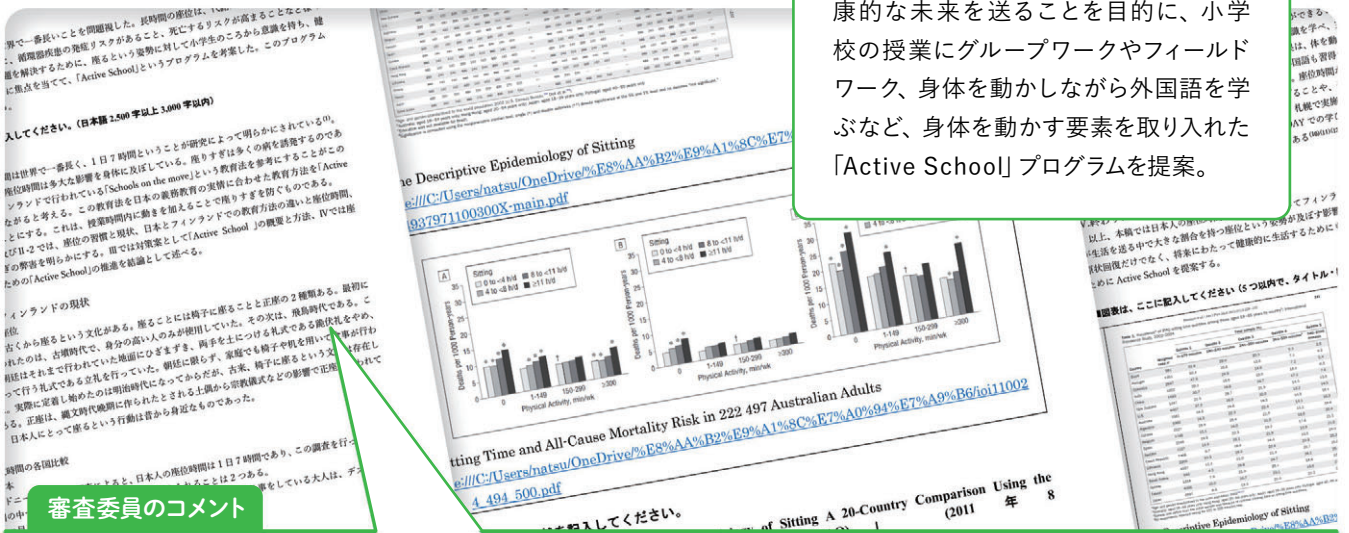
- 社会全般においてAEDなどのモノに着眼した解決策の提案が多い中で、ヒトに着眼している点を高く評価した。自身が実際に講習を受講していることもあり、全体的に主張に説得力がある。アプリの提案も興味深く、自治体や企業が一考する価値があると感じた。
- 「人は生を受けた段階で死に向かうもの」という考え方や、「人

- は生き続けるべきもの」という2つの相反する考え方があるなかで、論者は論点を「生き続けるためにできること」を述べていた。この点において論点に軸があり、評価できる。
- 自ら救命救急の資格を取得するなど本気で課題について考える姿勢が伝わってきた。使命感を感じる論文。

「Active School」の導入によって健康的な未来を築こう

提案内容

長時間の座位はさまざまな疾患の発症リスクを高めることから、身体を動かす習慣をつけて生涯の座位時間を減らし、健康的な未来を送ることを目的に、小学校の授業にグループワークやフィールドワーク、身体を動かしながら外国語を学ぶなど、身体を動かす要素を取り入れた「Active School」プログラムを提案。



審査委員のコメント

“日本人の座位時間の長さ”へのユニークな着眼と、実現可能な解決策の提示

八代—グローバルな視点、視野の広さを感じたのですが、参考文献に英語のものが含まれていたのを見て、納得しました。広く深く調査した内容をコンパクトにまとめている、論文構成が優れています。着眼点が面白く、解決策は決して難易度の高いものではありませんが、案外このような日常生活の見直しが大きな改善につながるのかもしれないと改めて気づかされました。一方で、もう大人の我々は手遅れなのかな、とも感じました。



「on the move」の紹介になっている面もあり、自らの考えを提案するという点は少し弱いと感じるものの、座位時間に注目したのは非常にユニークな着眼点で、これを高く評価しました。自分は日本人が座っている時間が世界一長いとか、それが病気につながっているという視点を持ったことがなかったので、面白く思いました。

齊藤—日本人の座位時間が世界一長いことを問題視した提案。フィンランドの「School



桑津—社会的な視点の高さ等への疑問は残りますが、主張には納得性があると感じました。



一次審査委員のコメント

- 日本人の座位時間を問題視したところが面白い。確かに、学校でも会社でも座っている時間は長いので、そこを変えることで物事がうまくいくとなるとよいと思った。「Active School」での授業内容を、アイデアでもいいのもう少し詳しく示せたらもっと良くなるのではないかと感じた。
- 文章構成や説得力といった全体の完成度が高い。
- 日本の文化と「座る」という行動に着目し、実現可能な解決策を出せている。企業でも立って打ち合わせすることは取り組まれており、具体的なイメージが湧いた。

- 論文構成がしっかりしており、読み手に安心感を与える。「Active School」というキャッチコピーを作り、歴史や世界状況を広く研究した上で考えられたアイデア。学校での学び方・学ばせ方を工夫することは、まさにサステナブルな社会構築に適切であると感じた。健康に生きる事は人間の幸せそのものであり、幸せであればサステナブル社会を作る努力もできる。これは「なるほど」と思い、自分にとっても新しい気づきであった。学校だけでなく、日本の企業などにも多く取り入れていくべきだと感じた。

アグリベンチャー「Lemna」 —アオウキクサを捨てない世界に—

提案内容

自身のアクアリウムの制作経験から身近な植物「アオウキクサ」に着目し、その増殖力の強さやたんぱく質含有量の多さ、バイオマス燃料としての可能性から、地球温暖化や食糧危機、エネルギー問題への対策として大都市屋上の農園化ビジネス「Lemna」（ウキクサの学名）を提案。

水槽の厄介者を社会課題の解決に活用しようという発想の豊かさ

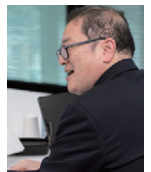
池上—水槽の厄介者に着目し、その可能性について論じていて、目のつけ所の面白さに感心しました。



八代—文章が非常にドラマチックで、読みながらわくわくさせられました。読み手を飽きさせない緩急のつけ方がうまく、かといって勢いで押し切るわけではなく、メリット・デメリットをしっかりとロジカルに整理しており、バランスの良さを感じます。生物の生命力を活用した応用が他にもあるのだろうと想起させられ、勉強になりました。



桑津—奇をてらわれない、分かりやすい提案に惹かれました。また、水棲植物の活用にも可能性を感じます。



齊藤—アオウキクサの屋上栽培による都市の緑化や食糧・エネルギー問題への貢献の提案で、文章力や考察力の高さを感じます。ただ、都市の屋上活用は近年さまざまな形態が生まれているため、本提案への潜在ニーズがどのくらいあるか。リターンが十分に見込めないとすると、ビジネスモデルとして普及させられるかが課題だと思います。



一次審査委員のコメント

- アクアリウム制作という自身の身近なところで存在している厄介者を、視点を変えて世の中の社会課題解決のための手段の一つとして使ってみようという発想の豊かさが魅力的。社会課題や問題はよくあるテーマだが、提言されている発案が興味深い内容で、高く評価したい。
- 負の資源を問題解決策としての正に転じるという発想が、斬新かつ大胆。
- 厄介なアオウキクサを地球温暖化や食糧危機の対策に利用する発想が面白かった。アオウキクサのように、実は厄介なものでも潜在的な価値を潜ませている何かが他にもあるよ

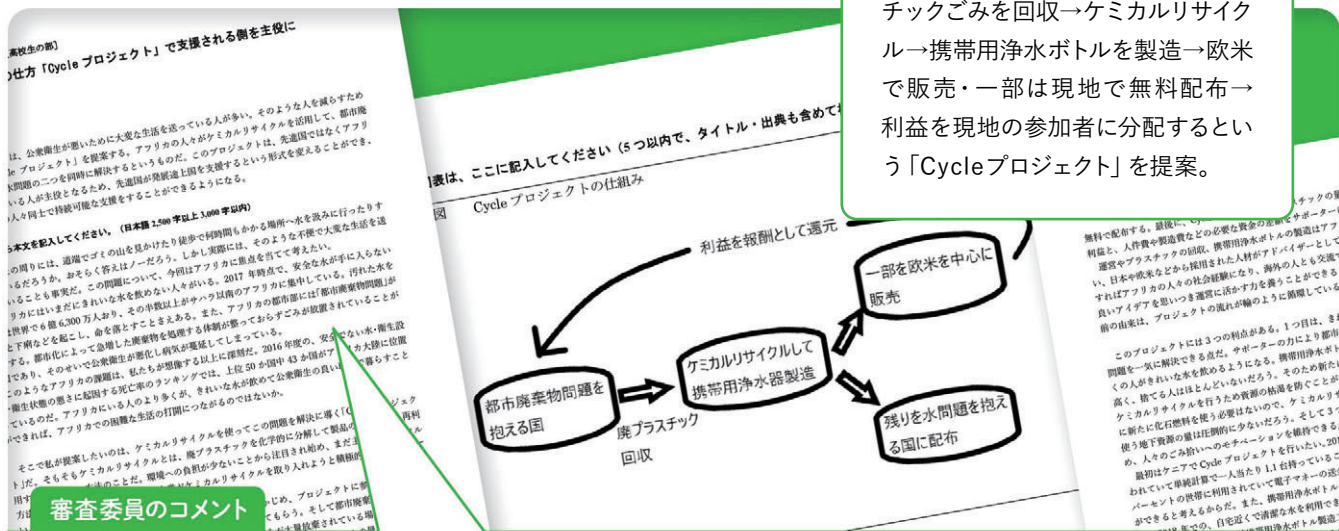
うな気がしてきた。世界にはまだまだ未知なものが多く、可能性を秘めている、そう思わせてくれる論文だった。

- アオウキクサという身近な植物をテーマに展開される興味深い論文。学名から取った論文名にもセンスを感じるし、都市型の景観問題にも配慮した屋上の農園化という観点にも感心した。屋上型にするのであれば、ガラスチューブのような形状をビルの屋上に渡らせ、シンガポールのように観光資源にするなど美的な活用方法などへの応用が効くとも思った。アオウキクサからイノベーションや社会課題への解決につながるかもしれない、これからも思考し実行してほしいと感じた。

新しい支援の仕方「Cycleプロジェクト」で支援される側を主役に

提案内容

安全な水が手に入らず、公衆衛生が悪いために命を落とす人が多いアフリカで、プロジェクト参加者がプラスチックごみを回収→ケミカルリサイクル→携帯用浄水ボトルを製造→欧米で販売・一部は現地で無料配布→利益を現地の参加者に分配するという「Cycleプロジェクト」を提案。



アフリカの自立を促すことにこだわった、大きな視点からの提案

最相—先進国がアフリカを助けるのではなく、アフリカがアフリカを助ける、1つのサイクルを作ろうとしている「たすきりレー」のアイデア。大きな視点から物事を見ている提案だと感じました。このような循環が起これば、確かに食糧難の解決につながるし、就学や就業の向上という人々の生活改善にも貢献できる点も良いと思います。浄水ボトルからもっと大きなプロジェクトにつながる可能性も秘めています。政治的な課題もあり、実現には難しさもあると思いますが、少しずつというのをたくさん重ねていくことの力がこの案には感じられ、高く評価しました。



八代—先進国主導ではなく、アフリカの自立を促すことにこだわったという強い意志がうかがえました。文章がとにかく読みやすく、感心しました。



伊吹—実は社会課題はつながっており、何かを解決することが他の課題解決につながる、そのような効果的な問題の分析から課題解決に至るまで、緻密な分析とストーリーで水の問題と都市廃棄物問題を同時に解決する提案をしています。社会課題解決はサステナブルな未来社会にとっても大変重要な観点であり、そのような要素がふんだんに盛り込まれた提案だと感じました。



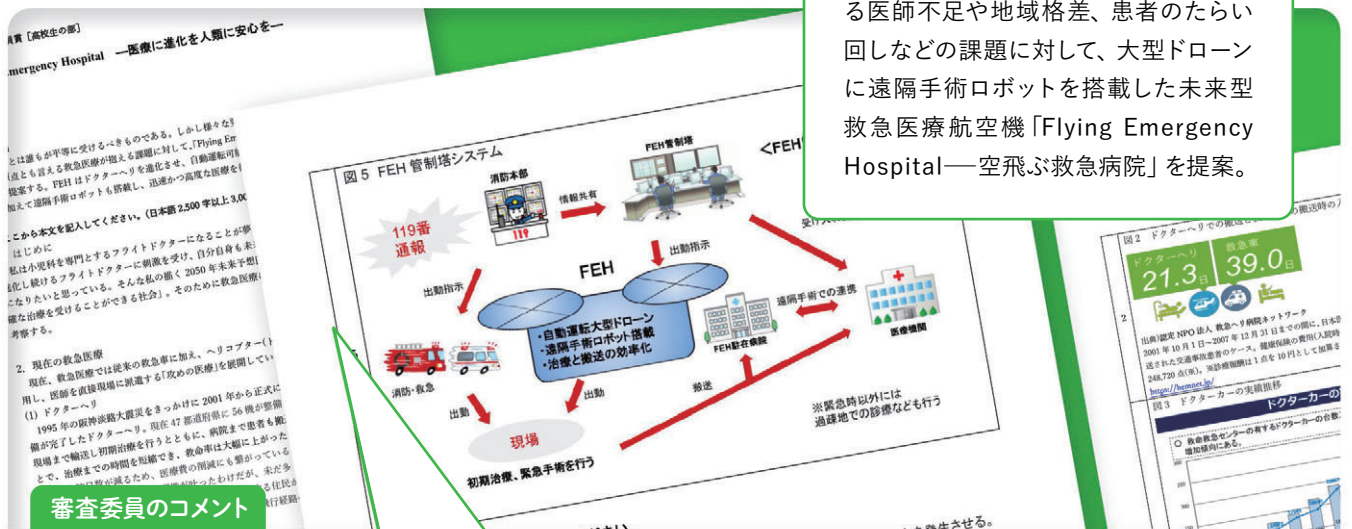
一次審査委員のコメント

- 話の規模が大きく、実現が可能かは判断がつかなかったが、地域と水と公衆衛生に着目し、未来予想図を描いている。
- 携帯用浄水ボトルそのものが、アフリカの水問題の直接的な解決手法であることを知った。ボトルを単にアフリカへ配布するのではなく、多くの立場の人々を巻き込み、まさに「循環型の社会の仕組み」を作り上げるという点でアイデアに工夫を感じた。
- 貧富の差を、先進国からの援助ではなく自国の活動で解消するという思考が良い。
- 廃棄物をリサイクルして携帯用浄水器を作るという発想が良い。プロジェクトの展開先にケニアを選んだ理由が、携帯が普及しているからという視点も面白い。発展途上国だけでなく欧米も巻き込んでおり、確かにぐるりと回る「Cycle」となっていると思った。

Flying Emergency Hospital —医療に進化を人類に安心を—

提案内容

「誰もが平等に、素早く、正確な治療を受けることができる社会」という未来予想図の実現に向けて、救急医療が抱える医師不足や地域格差、患者のたらい回しなどの課題に対して、大型ドローンに遠隔手術ロボットを搭載した未来型救急医療航空機「Flying Emergency Hospital—空飛ぶ救急病院」を提案。



自身の夢を起点に、強い課題意識を持って救急医療の未来を提言

池上—ドクターヘリは、過疎化が進む地方ではなくてはならないものになっています。ようやく拡大・定着してきたこのドクターヘリの将来を描き、大型ドローンで、緊急事態にはさまざまな医療行為ができるようにするという、救急医療の可能性を提案した論文に説得力を感じ、高く評価しました。



も貢献すると感じる。こういう未来なら応援したいと思いました。

最相—空飛ぶ救急病院とはSF的ですが、これぐらい想像力を羽ばたかせてよいと感じました。災害や事件・事故など、混乱する現場では防ぎ得た死があるし、地域格差解消に



伊吹—医療の本来あるべき姿を描き、現実の課題をしっかりと見つめながら、未来に向けた強い想いを持って提案していることが文章から伝わって来た点が印象的でした。現代社会において解くことが非常に難しい課題に対して、「空飛ぶ救急病院」という次世代・未来を感じさせる大胆な提案を行っています。未来に向けては、こうした技術の革新がさまざまな社会課題を解決し得るということを伝えてくれるような魅力的な提案だと感じました。



一次審査委員のコメント

- フライトドクターになる夢を起点に、大型ドローン、手術ロボット、管制塔システムといった技術を組み合わせた救急病院を発想しており、強い意思と実現可能性を感じさせる。
- ドローンに無人医療ロボットを搭載した「空飛ぶ救急病院」という大胆かつ斬新な提案に心が踊った。
- 将来の夢をベースに、課題感が力強く語られていることが印象に残った。実現性の是非はともかく、課題に基づいた解決策が論理的に論述されている。
- 2050年という未来を見据えた提言で、高齢化が進む日本で

- は多くの人が望む世界を描いている。
- 日頃から興味をもち、意識してよく研究している様子がうかがえた。大変具体的で、筆者が現実にしてくれそうな力強さを感じた。
- 自身の将来の夢と結び付けて論じているところに、筆者の問題意識の真剣さと情熱を感じ、読者の期待感を高めている。過疎地医療の改善に役立てることができるという点が興味と共感を覚えた。実現するまで時間がかかりそうだが、大いに期待したいところだ。



審査委員長

桑津 浩太郎 NRI 研究理事

「サステナブル未来予想図」のテーマは4回連続となりますが、過去3回同様、サステナビリティの枠組みで大胆な課題設定をすることは難しいかもしれないという懸念がありました。しかし今回は、着眼点の面白さやユニークさが際立つ作品が多く集まり、大変嬉しく思います。2050年の未来社会について、地に足をつけて実直に描き、高い実現性を感じられるアイデアや、我々の想像を超えるような予想外のアイデアを提示する作品など、さまざまな2050年の未来予想図がそろいました。

論文審査は、独自性や鋭い視点を持って問題を提起し、広い視野で実現性の高い解決策を提案した論文を高く評価するため、「問題発見力」「問題解決力」「文章力」「斬新・大胆な発想力」という観点から行っています。今回は、大胆な切り口から未来を描く作品が見られたことから、実現性に強くこだわることなく斬新・大胆な発想力に重きを置くことで、そのような作品も高く評価しました。



特別審査委員

池上 彰さん ジャーナリスト、名城大学教授、東京工業大学特命教授

みなさんが自分の目標を定めていて、研究や勉強しているところから未来を考えており、非常に地に足が付いた提案ばかりで優れているなと思いました。その一方で、2050年の未来予想図なのだから、現在からの延長線上ではない未来というものを、もう少し想像力を発揮して描いて欲しかったという思いも持ちました。

大学生の論文については、提案が実現したとき、その提案を受け入れる人間の精神状態について、より深い洞察が欲しいということを感じました。高校生の論文については、視野の広い考察が見られたことを嬉しく思いましたが、もっと雄大で破天荒な発想も欲しいと感じました。また、勝手な要望かもしれませんが、コロナ禍にあって、感染症に関する提案や、そもそも生きることを考えるような提案があればなお良かったと思っています。



特別審査委員

最相 葉月さん ノンフィクションライター

大学生の論文には想像力が豊かでユニークな作品が多く、楽しく拝読しました。高校生の論文には、地に足がついた、全体的に真面目な作品が多かった印象です。約30年後の2050年の未来社会と言っても、地に足が付きすぎてなかなか意外性が出てこないのは、過去の受賞作品の影響を受けている面も少なからずあるのかなと感じました。

また、印象的だったこととして、例えば空き家問題と少子化問題と貧困問題、地域格差と少子高齢化など、今ある社会課題を2つ3つとつなげて解決策を模索し、新しい価値を生もうとする作品が複数あったことが挙げられます。課題をかけ合わせることによって解決につながることもあるかもしれませんが、あまりにも大きな問題を抱えこみ過ぎて、それぞれの課題が実際にどこから発生しているのかを考察しきれていないものもありました。今起こっている問題をさまざまな角度から調べて深く理解し、その上で2050年の社会に対して想像力を羽ばたかせてほしいと思いました。

論文審査 講評



審査委員

齊藤 義明 未来創発センター 2030年研究室長

ここ数年の応募論文には、例えば脱炭素やフードロス、貧困、自然エネルギーの活用など、SDGsのテーマに合致した作品が多く見られるようになってきており、着眼点の面白さという点では少し物足りなさを感じていました。

しかし今回のコンテストでは、教育システムの改革、サルコペニア、座位時間の短縮、救命救急アプリなど、大学生・高校生ともに独自のユニークなテーマ設定が多く見られたことを嬉しく思いました。論文を拝読し、審査していて大変楽しかったです。



審査委員

八代 夕紀子 OpenStandia 事業部長

今年は、大学生の作品に近未来を感じさせてくれる、チャレンジングな内容が多かった印象です。「次の主役はわたしたち」というテーマに対して、大学生は自分の未来の姿をイメージしやすかったのか、自分事として捉えて熱意を感じさせる作品や、調査力や文章力にも優れた、レベルが高い作品が多く見られました。

高校生の作品は、テーマに「2050年の社会」が前面に出されたためか、例年より扱う題材のバリエーションが増え、着眼点の良さ、面白さの点で大変レベルが高かったと思います。高校生に30年先の2050年のイメージは難しかったか、そこまでの未来感を感じる作品は少なかったものの、落ち着いた安定感のある文章が多かったことに感心しました。



審査委員

伊吹 英子 サステナビリティ推進室長

今回も2,215作品もの応募を頂き、また、長引くコロナ禍にもかかわらず留学生からも多くの応募を頂いたことを大変嬉しく思っています。ここに深く御礼申し上げます。

大学生の作品では、若い世代ならではの着眼点で未来社会に向けた独自の提案がされ、なぜそれが必要なのか、課題をどのように解くかが論理的に示されていました。高校生は、高校生らしい視点で、身近な話題から未来社会に向けた大胆な提案に構想を広げるなど、思考の展開が興味深いものも多く見られました。

こうした考えを持つ若者世代が将来の社会を担っていくことに期待を感じるとともに、みなさんのアイデアに大いに感心しました。

NRI学生小論文コンテスト2022

最終審査会



最終審査会

それぞれが描く「2050年の未来予想図」と その実現に向けたアイデアをプレゼン



2022年12月19日、NRI東京本社の大会議室において、「NRI学生小論文コンテスト2022」の最終審査会が行われました。

論文審査を通過した9作品（大学生の部4、高校生の部5）の執筆者がプレゼンテーション審査に臨み、厳正な審査を経て、受賞論文を決定しました（決定した各賞はP.76～80参照）。

開会にあたって、NRI代表取締役会長 兼 社長の此本臣吾が挨拶。

「今日は、厳正な審査を経て最終審査に残った高校生5名、大学生4名、計9名の方にお集まりいただいたことを本当に嬉しく思っています。みなさんそれぞれの視点で見出した2050年の社会課題とそれを解決するアイデアを、リラックスして伸び伸びと自分の言葉で発表していただければと思います」と激励しました。



[最終審査会 審査委員]

審査委員長

桑津 浩太郎 NRI研究理事

特別審査委員

池上 彰 ジャーナリスト、名城大学教授、東京工業大学特命教授

最相 葉月 ノンフィクションライター

梅野 修 共同通信社 客員論説委員

審査委員

此本 臣吾

桜原 猛

柳澤 花芽

齊藤 義明

八代 夕紀子

NRI代表取締役会長 兼 社長

NRI執行役員

NRI執行役員

NRI未来創発センター 2030年研究室長

NRI OpenStandia 事業部長

最終審査会レポート

2022年12月19日に行われた「NRI学生小論文コンテスト2022」の最終審査会における「プレゼンテーション審査」の様子をレポートします。

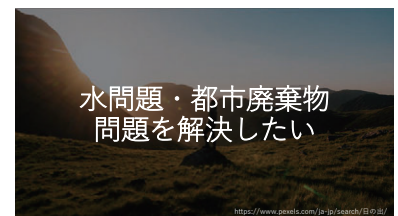
*プレゼンテーションは6分+質疑応答4分で、氏名の五十音順に行いました。

高校生の部

新しい支援の仕方「Cycleプロジェクト」で支援される側を主役に

阿武 和奏 あんの わかな

プレゼン動画はこちら https://www.youtube.com/watch?v=nZghyml_nAE



水問題と都市廃棄物問題という2つの課題を抱えるアフリカで、プラスチックごみを回収→ケミカルリサイクル→携帯浄水ボトル製造→欧米で販売・一部は現地で無料配布→利益を現地の参加者に分配という「Cycleプロジェクト」を提案。「2つの課題を同時に解決し、2050年のアフリカ社会をより良いものにしたい」と述べました。

着想を得た5つの情報やプロジェクトの効果をわかりやすくプレゼン。アフリカの人々の自立を促すプロジェクトでありたいという強い想いが感じられました。



審査委員との質疑応答

Q — 処理工場などに一定のお金がかかると思うのですが、その初期費用はどう考えていますか。

A — 工場の初期費用については、現地でケミカルリサイクルの事業を行おうとしている企業はいろいろとあるようなので、そういった既存の企業を誘致することを考えています。

Q — プロジェクトを実行するのは、どのような組織をイメージしていますか。

A — 「Cycleプロジェクト」はアフリカの人々が主役になるという位置付けなので、アフリカの人々の中からまず運営する人を募集します。ただ、アフリカの人たちだけではうまく進められない部分もあると思うので、先進国の人も少人数募集します。あくまでもアフリカの人々が主体となるようにして、実行する組織としてはNGOの形を考えています。



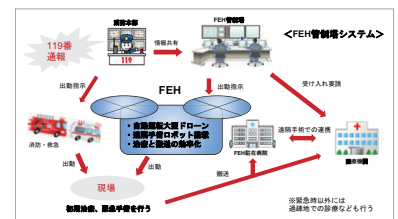
Flying Emergency Hospital —医療に進化を人類に安心を—

勝田 真悠 かつた まゆ

プレゼン動画はこちら <https://www.youtube.com/watch?v=FIIIKauUiuM>



救急医療が抱える医師不足や地域格差、患者のたらい回しなどの課題に対して、大型ドローンに遠隔手術ロボットを搭載した未来型救急医療航空機「Flying Emergency Hospital(FEH) —空飛ぶ救急病院」を提案。「FEHは、全ての人が平等に、素早く、正確な治療を受けられる社会に大きく貢献する」と主張しました。FEHの特徴や運用システム、社会にもたらすメリットなどを落ち着いた語り口でプレゼン。次世代の救急医療の可能性と実現への強い想いが伝わりました。



審査委員との質疑応答

Q —ドローンであれば操縦士が不要だということはあると思いますが、なぜドクターヘリではダメなのか、あえてドローンにする理由を教えてください。

A —ヘリコプターは尾翼が大きいために内部空間も小さく、着陸場所も限られますが、大型ドローンであれば機体すべてが空間なので遠隔手術ロボットも装備できます。災害時にはいちどに多くの人を搬送する必要があるため、操縦士のスペースが不要な分だけ多くの人を乗せることもできていると考えています。

Q —遠隔で医師が手術をする場合も、Flying Emergency Hospitalで患者に医療機材を装着するスタッフが必要だと思います。そのスタッフはどうするのですか。

A —乗って行った救急医と看護師が患者に遠隔手術ロボットを装着することを想定しています。

Q —遠隔手術ロボットの実現性について、日本での現状を教えてください。

A —現在使われている遠隔手術ロボットにはアメリカ製の「ダヴィンチ」と国産の「hinotori」があり、現在は150km離れた病院同士での遠隔手術実験が成功している段階です。2024年にはISS国際宇宙ステーションからの遠隔手術実験に挑戦することも発表されていますので、今後はもっと症例数が増えていくと思います。



「救うべくして救った命」

倉持 葵成 くらもち きなり

プレゼン動画はこちら https://www.youtube.com/watch?v=Xz6o1k7T3_o



小児医療に携わる夢を起点とし、子どもの救命講習から得た学びをもとに、救命講習の受講率向上と緊急時に救命に携われる人を集めるアプリの開発を提案。「本来ならば救えた命という言葉は未来の子どもたちからは消し去り、『救うべくして救った命』という言葉に変えていきたい」と主張しました。

救命救急の課題を掘り下げ、受講率向上のアイデアやアプリの具体的な機能などを提示する堂々としたプレゼンが、提案の説得力をさらに高めました。

審査委員との質疑応答

Q — こういうアプリは普及させるのが大変で、一度インストールしても使用頻度が少ないとアンインストールされてしまうこともあるかと思いますが、使い続けてもらうためにどういったアイデアを考えていますか。

A — 普及させるためには、接触確認アプリ「cocoa」のように国としてアプリを作って広く知ってもらうことが大切だと思います。使い続けてもらうためには、小中高の教育課程で何度も救命講習を行ったり、その後も自動車運転免許の更新時に救命講習を受けてもらったりして、アプリを再認識してもらえるとよいと考えています。

Q — 救急車が到着するまでの平均時間は約9分間とのこと。アプリのアラートが鳴ってから傷病者のもとに救命講習経験者が駆けつけるまでにこのアプリが果たすのはどんな役割か、そのアイデアをもう少し教えて頂けますか。

A — アプリには傷病者までの最短経路が表示され、近くのAEDの設置場所も確認できるので傷病者のところにAEDを持って行くことができます。記憶確認のための救命救急の簡易マニュアル表示機能も考えています。

2つの提案

- ① 救命講習の受講率を上げる
(普通救命講習・EFR-CFCなど)
- ② 救命措置が必要な際に、救命に携われる人を多く集めるアプリを国が開発する



「Active School」の導入によって健康的な未来を築こう

児玉 夏楓 こだま なつか

プレゼン動画はこちら https://www.youtube.com/watch?v=2gwY_C_VYFE



日本人の座位時間が世界最長であることに着目し、座り過ぎによる健康リスクを軽減するために、小学校の授業で身体を動かしながら学び、全員が座位姿勢を中断できる実践的プログラム「Active School」を提案。「Active Schoolを実践して小学校の頃から座位姿勢の中断を行い、生涯の健康リスクを減らしたい」と訴えました。初めに全員に立ってもらい「座位姿勢の中断」という語句を印象づけた上で、調査結果の考察や学びの形式を明快にプレゼンし、プログラムの実現性を強調しました。



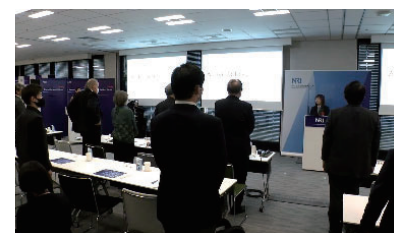
審査委員との質疑応答

Q —学校では、座って人の話を聞くこととアクティブに行動することのバランスが必要だと思います。座位の中断は30分に1回くらい行えばよいということですが、その程度で良いものなのですか。座位の中断についてアイデアがあれば教えてください。

A —厚生労働省によると、30分に一度立ち上がることで健康リスクを軽減できるそうです。現在、学校では発表者だけが立ち上がるので、全員が座位を中断できないのが現状です。それを打破するために全員が一斉に立ち上がる形式を3つ考案したのですが、提案した方法以外にも、こういった例をもっと出していくことで、健康的な学習が行えるのではないかと考えています。

Q —座位を中断することが本当に必要なのは大人の年代ではないかと思うのですが、このプログラムに中高年世代が参加する可能性はあるのかという素朴な疑問があります。そのあたりはどう考えていますか。

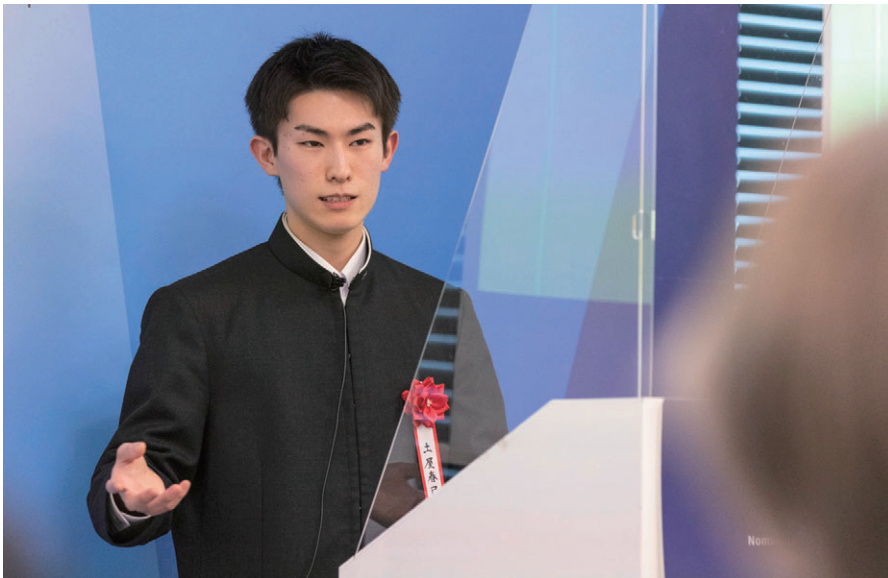
A —フィンランドには、職場全体で休憩時間を設けて座位の中断や座位時間の減少を図る「タウコユンパ」というものがあります。日本でも会社全体でそういった取り組みを行っていくことが重要だと思います。



アグリベンチャー「Lemna」 —アオウキクサを捨てない世界に—

土屋 春己 つちやはるき

プレゼン動画はこちら <https://www.youtube.com/watch?v=KEVY5dqxweE>



アクアリウム制作経験から身近な植物「アオウキクサ」に着目し、その増殖力の強さやたんばく質含有量、バイオマス燃料としての可能性を利用した大都市屋上の農園化ビジネス「Lemna(レムナ)」を提案。「地球温暖化現象、食糧問題、エネルギー問題という3つの社会問題の解決に貢献できる画期的ビジネスだ」と主張しました。生物を廃棄することへの心苦しさをアオウキクサの活用方法を模索した姿勢や、ビジネスのデメリットも含めて考察するプレゼンが、提案の説得力を高めました。

※Lemna(レムナ)はウキクサの学名



審査委員との質疑応答

Q—ウキクサにこういった活用方法があるとは知らなかったのですが、大変勉強になりました。土屋さんはもともとウキクサにこのような活用方法があることを知っていたのですか。

A—アクアリウムを制作しているときに水槽にウキクサがだんだん増えてしまい、それを毎回捨てているうちに「何かいい活用方法はないか?」と思い、調べていくうちにウキクサについていろいろと学んでいきました。

Q—面白い視点だなと思いましたが、ボウフラが湧いてしまうことも考えられますし、重要なのは水質管理だと思うのですが、その点についてはどうお考えですか。

A—水質管理に関しては、例えばメダカを放して自然に減らす方法だと、ウキクサを回収する時にどうしてもメダカが混ざってしまうといった問題が発生すると考えられます。ですから、これも農業の一環として捉えて、農薬を撒くという対策を考えています。



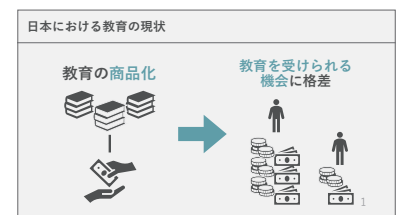
「もっと頑張れ」と大人たちは言うけれど ~教育格差是正のための社会構想~

上野 暖登 うえのはると

プレゼン動画はこちら <https://www.youtube.com/watch?v=bTgdxC15GR0>



日本の教育格差是正のために教育を共有財とし、優れた授業に誰でもアクセスできる「教育アーカイブ制度」と、さまざまな教育サービスに利用できるサービス券を配布する「教育バウチャー」の導入を提案。「必要なのは競争の中にいるプレイヤーを叱咤激励することではなく、ルールそのものを変えていくことだ」と主張しました。現状の課題や制度のメリットを多角的に捉えるプレゼンが提案のリアリティや納得感を高め、「公正な社会を次世代へ手渡したい」という言葉が強く響きました。



審査委員との質疑応答

Q—教育サービスを共有化して機会が均等になったとしても、同じ授業を受けても理解力には個人差が出てしまうと思います。そういう意味では、やはり格差は生じてしまう可能性があると思うのですが、そのあたりにはどう対応していきますか。



A—教育アーカイブ制度や教育バウチャーが導入されると、学校の外に学びの機会ができるわけですから、その分、学校現場の教師の負担は軽減されます。その時間を使って、アーカイブの授業では理解が追い付かない生徒たちを一齐授業ではなく一対一でサポートしていくことを考えています。それでも格差が全くのゼロになることは難しい、というのが現実だとは思っています。



Q—現状でこれと似たようなこと、つまり自ら主体的・選択的にレベルやタイミングに合わせて学ぼうと思えば、YouTubeを使うとある程度できると思うのですが、あえて共有財や運営委員会による管理というアイデアにしたのはどうしてですか。

A—確かにYouTubeにはたくさんの授業動画がありますが、内容的に偏り過ぎではないかと思えるようなものも授業と称してアップされています。やはりYouTubeで質の面を担保することは難しいと思うので、共有財や運営委員会によって管理していくことを考えました。



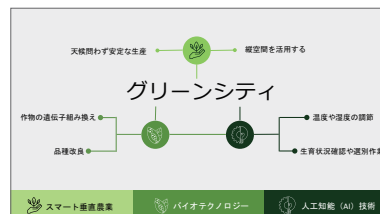
ようこそ2050年グリーンシティへ ～緑の天国一日体験ツアー～

呉 小優 うん しゃおゆう

プレゼン動画はこちら <https://www.youtube.com/watch?v=vKclefTiRr8>



食糧不足解消のための開発と環境問題の悪循環への解決策として、バイオテクノロジーとAI技術を基盤としたスマート垂直農業による緑豊かな都市「2050年グリーンシティ」を提案。「2050年に向けて、全地球市民の努力をもってグリーンシティのような幸せが満ちあふれた世界を実現できると信じている」と訴えました。物語調で始まるユニークなプレゼンで聴衆を惹きつけ、後半は丁寧な説明で持続可能なグリーンシティの実現をめざす実直な想いが伝わりました。



審査委員との質疑応答

Q — 論文を拝読したときから、描かれている2050年の世界がとても楽しくて、最終審査会のプレゼンではきっと何らかの絵を見せていただけるだろうと期待していました。さすが留学生の視点で、とてもグローバルな描き方だと思いました。



その一方で、提案してくれた世界に対して、日本ならではの貢献できることや、日本が現在直面している課題に対して効きそうなことは何かありますかでしょうか。呉さんから日本を見て、ご意見やアイデアがあれば教えてください。



A — グリーンシティの一番の特徴は、街全体が緑に囲まれていて、建物が緑化されていることです。日本にも緑化建物が多く、日本に来てきれいな緑化建物を見て、とても感銘を受けました。日本の緑化建物では、使っている植物の種類や管理などが現在の課題となっているので、それらについてはAI技術を活用することによって改善できるところがあると思います。



Space Sarcopenia Station ～人生はもっと輝ける～

黒松 俊吾 くろまつ しゅんご

プレゼン動画はこちら <https://www.youtube.com/watch?v=tFfWTeysGUo>



加齢によって全身の筋力が衰え、死亡や要介護のリスクが高まる「サルコペニア」の高齢者が、少ない筋力で日常動作を行え、地球を眺めながら余生を送れる宇宙の老人ホーム「Space Sarcopenia Station」を提案。「地球の重力に苦しむサルコペニアの高齢者に、宇宙に行って第二の人生を送ってほしい」と訴えました。

冒頭、ガガーリンの言葉「地球は青かった」をロシア語で披露して聴衆の意表をつき、その後、サルコペニアの病態や宇宙での生活のイメージをわかりやすくプレゼン。提案の説得力を高めるとともに、人々がよりよい余生を過ごす未来構想実現への強い想いが伝わりました。



審査委員との質疑応答

Q — 医学を学ばれていて宇宙はあまり身近にはないと思うのですが、どういうきっかけでサルコペニアと宇宙を結びつけることを思いついたのですか。

A — 医学には宇宙医学という分野があり、2年ほど前から興味を持って学会にも参加しています。宇宙に行く人の健康管理が主流ですが、もとは宇宙環境を利用した病気の治療が主体としてあり、無重力環境が寝たきりの状態に似ているということが言われていて、これを私も知っていました。ご老人を宇宙に連れて行くことは負担が大きいので初めは結び付けて考えていませんでしたが、病院実習でサルコペニアの患者さんを目の前にしたとき、サルコペニアと宇宙がリンクして、患者さんを笑顔にするために宇宙に連れて行きたいと思うようになりました。

Q — 宇宙で余生を過ごすということは、宇宙でお亡くなりになるわけですよね。その死亡確認は誰がするのか、ご遺体はどうするのかという点はどのように考えていますか。

A — ムーンビレッジ構想によって2050年頃には月に医療施設ができていくことも予想されるので、死亡確認は月に連れて行って行うか、または地球に連れて帰って行う方法を想定しています。ご遺体については、地球に送るときに大気圏で燃やす火葬か、月に埋める土葬の2つの選択肢のうち、その人の文化に合わせて選べるとよいと考えています。



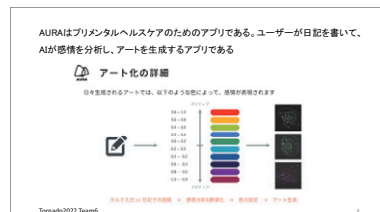
ITの利用で「誰一人」取り残さない医療を目指して

河野 亜希 こうの あき

プレゼン動画はこちら <https://www.youtube.com/watch?v=dMRm73i1xX8>



医療の高度化・細分化により患者の精神状態が置き去りにされているという課題に対し、患者の日記から感情を分析してデジタルアートで精神状態を表現し、医師が患者の理解促進に利用できる自作アプリ「AURA」を提案。「ITの力を利用して、背景の異なる患者を『誰一人』取り残さない社会を作っていきたい」と訴えました。アプリ製作の思いを丁寧に説明するプレゼンからは他力本願ではなく自ら課題を解決しようとする強い意志と行動力が感じられ、実現への期待感を高めました。



審査委員との質疑応答

Q — 「AURA」は自分で作成されたということですが、もう少しアピールしてくださいませか。実際に試してみた結果では、患者の精神状態を把握できたのでしょうか。

A — 「AURA」は直感的に使い、メンタルヘルスケアの入口になるアプリケーションです。患者さんが日記を書くと、Google Natural Language APIというツールで文章の感情を分析して点数化し、別のプログラム言語を使ってデジタルアートを描画します。デモを作ってテストしたところ、「今日は嬉しかった」とか「友達と出かけて楽しかった」という文章があるときの点数と、「今日はテストに落ちてしまった」というような時の点数とは全く異なっていました。

Q — 医師が「AURA」の点数によって患者の精神状態が普通よりもかなり悪いと確認した場合、そのあとどうすればその患者さんをもっと深くフォローできるようなところにつなげることができるのでしょうか。

A — まず、医師は患者さんの許可がある場合に点数を見ることができ、患者が望む場合は精神科や匿名で相談できる電話口を紹介します。ある一定以下の点数が続いたり、ネガティブな文言が続いたりする場合には、医師を介さずに自動で通知を送って相談窓口などの情報を提供する自動プッシュ通知というものも考えています。



最終審査結果および評価のポイント

「サステナブル未来予想図 ～次の主役はわたしたち！2050年の社会を描こう～」をテーマとして開催された「NRI学生小論文コンテスト2022」は、大学生の部4作品、高校生の部5作品、計9作品が最終審査会に進みました。

2022年12月19日の最終審査会において筆者によるプレゼンテーションを実施し、厳正な審査の結果、以下のように受賞論文を決定しました。

大学生の部

大賞

「もっと頑張れ」と大人たちは言うけれど
～教育格差是正のための社会構想～

上野 暖登



評価のポイント

- 優れた授業を共有財とする「教育アーカイブ制度」と、教育サービスに利用可能な「教育バウチャー」の導入はきわめて現実的な提案で、実現性も高い。
- 教育の自由化の名の下に急激に進む教育の市場化への危機意識を具体的な提案に結び付け、次の時代の教育システム像を示している。
- 公的な取り組みとしたときの課題を踏まえた実直かつリアリティある解決策で、筆者の本気度合いや熱意が伝わる。
- 言葉選びが俊逸で文章力が高く、論展開もあざやかで、論文としての完成度が高い。

優秀賞

ITの利用で「誰一人」取り残さない医療を目指して

河野 亜希



評価のポイント

- 医療の高度化・細分化により患者の精神状態が置き去りにされているという現状課題を、医学生として主観・客観両面から分かりやすく提示しており、その深い考察と問題把握には説得力がある。
- コンテストのテーマ詳細文に違和感を持ち、問題解決を考える批判的精神が好ましい。
- 他力本願ではなく、医師が患者の感情の理解促進に利用できるアプリを自作し、自ら課題を解決しようとする強い意志と行動力を高く評価した。
- 患者の精神状態をアートで表現するアイデアも興味深い。医療現場での活用を期待したい提案である。

最終審査結果および評価のポイント

大学生の部

特別審査委員賞

Space Sarcopenia Station

～人生はもっと輝ける～

黒松 俊吾



評価のポイント

- 地球を見ながら晩年を過ごすとは仰天のアイデアで、極めてユニークかつ斬新、興味深い未来予想図である。
- 「サルコペニアの高齢者は地球の重力に苦しんでいる」という訴えが印象的。この観点が提案の説得力を高めている。
- 実現性は未知数だが、老後の人生や疾患を宇宙に行けることでポジティブなものに変えたいという宇宙医学を志す筆者の想いが響く。
- 具体的アイデアや実現への課題をていねいに論述している点も良い。

留学生特別賞

ようこそ2050年グリーンシティへ

～緑の天国一日体験ツアー～

呉 小優



評価のポイント

- コンテストのテーマに基づき、2050年という時間軸で未来予想図を具体的に構想している点を高く評価した。
- SF小説のような描写が効果的で、筆者が描く未来像を読者に難なくイメージさせる。
- プレゼンテーションにおいても、持続可能な「2050年グリーンシティ」のイメージ像をわかりやすく表現し、提案をより説得力のあるものになっている。
- ファクトや事例の使い方が優れている。構成も良く、読みやすい論文であった。

高校生の部

大賞

「救うべくして救った命」

倉持 葵成



評価のポイント

- 一般市民をネットワークでつなぎ、臨機応変に救命救急チームを結成できるという意味で、非常に画期的なアイデアである。
- アプリに含めるべき機能の考察も的確で、未来社会では「本来ならば救えた命」を「救うべくして救った命」に変えたいという筆者の主張には説得力がある。
- 救命救急に限らず、地域防災のための重要な地域資源として成長していく可能性も感じられる。
- 非常に実現性の高い提案であり、期待感を抱かせる。

優秀賞

「Active School」の導入によって健康的な未来を築こう

児玉 夏楓



評価のポイント

- まず、日本人の座位時間が1日7時間と世界一長いことに着目した点が、ユニークで興味深い。
- 座位時間が長いことは健康に悪影響をもたらす、身体を動かすことは色々な意味で人を健康にするという問題意識の提示も優れている。
- フィンランドの学校で導入されている「Schools on the Move」を研究するなど、グローバルな視点と視野の広さも感じられる。
- 広く深く調査した内容をコンパクトに記述することで主張の納得性を高めており、論文構成も優れている。

最終審査結果および評価のポイント

高校生の部

優秀賞

アグリベンチャー「Lemna」

—アオウキクサを捨てない世界に—

土屋 春己



評価のポイント

- 身近にあった水槽の厄介者“アオウキクサ”を、未来に向けて社会課題の解決に活用しようとする筆者の気づきが素晴らしい。その着眼点や発想の豊かさを高く評価したい。
- 文章力が高く、ドラマチックかつ緩急をつけて読み手を飽きさせない。ビジネスのメリット・デメリットをロジカルに整理しており、考察力にも優れ、論文としてのバランスが良い。
- 生物の生命力を活用した応用が他にもあるのだろうと期待感を高めてくれる提案である。
- 自らの経験に着想を得た提案。ぜひ将来、ベンチャービジネス化をめざしてほしい。

特別審査委員賞

新しい支援の仕方「Cycleプロジェクト」で 支援される側を主役に

阿武 和奏



評価のポイント

- 先進国主導ではなく、アフリカに暮らす人々が同じ地に暮らす人々を助ける循環サイクルを生み出すアイデアであることを高く評価した。
- 緻密な問題分析とストーリーで、水問題と都市廃棄物問題を同時に解決する提案であり、実現性も高い。
- アフリカの人がアフリカの人を助ける、いわば“たすきリレー”であるCycleプロジェクトが稼働すれば、浄水ボトルに限らず、その他の広い展開も期待できる。
- 「スケールの大きいことを書きたかった」という執筆動機や、支援される側の人を主役にする発想、アフリカの自立を促すことにこだわる強い意志が、審査委員の共感を集めた。

最終審査結果および評価のポイント

高校生の部

特別審査委員賞

Flying Emergency Hospital

—医療に進化を人類に安心を—

勝田 真悠



評価のポイント

- ドクターヘリの将来像として、遠隔手術ロボットを搭載した大型ドローンという次世代・未来の救急医療の姿を、想像力を発揮して大胆に描いている。
- 現実の課題をしっかりと見つめながら論理的に解決策を述べており、説得力を高めている。
- 自身のフライトドクターになる夢を起点にした「一人でも多くの救急患者を助けたい」という強い想いが伝わってくる提案である。
- 未来に向けて、医療格差の是正のために「全ての人が平等に、素早く、正確な治療を受けられる社会の実現」を目指して提案する姿勢も評価したい。

ファイナリスト対象!

NRI社員によるプレゼンパーソナルアドバイス

2021年のコンテストより、最終審査会に進んだ論文執筆者を対象に、希望者のみにオンラインでNRI社員（審査委員以外）がプレゼンテーションのアドバイスを行っています。

[アドバイスするポイント]

- ◆ プレゼンの長さ
- ◆ 表情や目線
- ◆ 重要ポイントの伝え方
- ◆ パッション
- ◆ 声の大きさ・話のスピード
- ◆ 身振り手振り
- ◆ 1文の長さ

※発表者に応じてアドバイス内容は変わります

[プレゼンパーソナルアドバイスを受けたファイナリストの感想]

大学生

- ・ 客観的なアドバイスをいただき、それに基づきさらに練習し、大変役に立った。
- ・ 「ジェスチャーが少ない」「一文の長さは適切」といった具体的なアドバイスが聞けて良かった。
- ・ 客観的なアドバイスが大変参考になった。ポジティブなメッセージを多くいただいたので自信になった。

高校生

- ・ プレゼンに対して不安があったので、アドバイスをもとに練習することで自信につながった。
- ・ プレゼンを時間内に収まるよう添削してもらった。
- ・ 内容はもちろん、話し方や目線、手振りのことまでアドバイスしていただき、プレゼンに慣れていなかったのが助かった。
- ・ プレゼンのリハーサルとなり、本番はあまり緊張せずに発表できた。より良くするためのポイントや良かったところなどを明確に教えてくださり、それをシートにまとめてくださったため後から見返すこともでき、プレゼンを改善できた。



NRI社員アドバイザー



的確で具体的なアドバイスを何個もくださり、自分のプレゼンの良い点と改善点がはっきり見えました。とても話しやすい雰囲気、質問しやすかったです。さらにプレゼンの練習を頑張ろうと思うきっかけになりました。

最終審査を終えて



審査委員長

桑津 浩太郎 NRI 研究理事

2022年は、終わりが見えないコロナ禍、ウクライナ戦争、インフレなど、日本や世界の環境が激変し、非常に落ち着かない日々であったと思います。このような状況にあって、相対的にSDGsに重きが置かれたい傾向が少し出てきているのではないかと感じていました。しかし、今日みなさんのプレゼンテーションを拝見し、大きな長い目線からSDGsを捉えていくことはやはり大切であり、日々の環境が激変しているからこそ、あえて立ち止まり、環境の変化にとらわれずに自ら行動して行くことの重要性を改めて教えていただいたと思っています。

受賞された高校生、大学生のみなさん、おめでとうございます。このたびはコンテストにご参加いただき、ありがとうございました。



特別審査委員

池上 彰 さん ジャーナリスト、名城大学教授、東京工業大学特命教授

みなさんがいったい2050年にどのような社会を考えているのか。この前提にはもちろん、今あるさまざまな課題をどのように解決しようかという問題意識があると思いますが、2050年を現在の延長線上で考えるのか、あるいは全く違う未来を考えるかで、解決策の方向性も変わってくるのだらうと思いつつ、みなさんのプレゼンテーションを拝見させていただきました。

プレゼンテーションはどれも大変優れていて、楽しかったです。いきなり「立ってください」と言われたり、ドキッとするような問いかけをされたりと、みなさん最初のつかみが実に見事で、一段とプレゼンテーション能力が高くなっているなどひたすら感心して拝見しました。受賞されたみなさん、おめでとうございます。



特別審査委員

最相 葉月 さん ノンフィクションライター

高校生の論文には、高齢化や地域格差、最終審査までは残らなかった作品の中にも空き家問題など、地に足がついて真面目で、現実問題を非常にくまなく実にピピッドに感じているのだなと思いました。ただ、30年後の2050年の社会でも、まだスマホがあることが前提になっていることが気になりました。今のスマホを超えるような情報交換の手段などを、もう少し想像してみたいと思います。

大学生の論文は、例年に比べて想像力豊かでユニークなものが多く、大変面白かったです。また、医学生の実験が多かったのは、過去受賞作の影響か、あるいは医療の現場に解決すべき課題が多いということなのか、おそらく後者だと思います。このことは真摯に受け止めたかったです。

みなさんの素晴らしいプレゼンテーションを拝見し、本当に楽しい時間を過ごさせていただきました。受賞されたみなさん、誠におめでとうございます。

表彰式

「NRI 学生小論文コンテスト2022」の最終審査会に続いて表彰式が行われました。

表彰式では、NRI代表取締役会長 兼 社長の此本臣吾が、大学生の部4名、高校生の部5名、計9名の受賞者それぞれに表彰状を授与。会場のNRI東京本社大会議室には大きな拍手が響き、受賞者は晴れやかな笑顔を見せてくれました。

懇親会の開催は、コロナ感染対策のため今年も見送られましたが、表彰式後に特別審査委員の池上彰さん、最相葉月さんと受賞者が交流する時間が設けられ、しばし歓談しました。



受賞者一人ひとりに表彰状を手渡すNRI代表取締役会長 兼 社長の此本 臣吾



大学生の部 優秀賞受賞の河野 亜希さん



高校生の部 優秀賞受賞の児玉 夏楓さん



高校生の部 優秀賞受賞の土屋 春己さん



閉会挨拶をするNRI執行役員の検原 猛



閉会后、池上・最相両特別審査委員と歓談



受賞された大学生の部4名、高校生の部5名のみなさん、おめでとうございます！

受賞者の言葉

大学生の部 大賞

「もっと頑張れ」と大人たちは言うけれど ～教育格差是正のための社会構想～

上野 暖登 さん



私がこの論文をどうして書いたのかという話ですが、そもそも私は今の社会に希望を感じられず、出口の見えないこの社会でどうすればいいのか模索する中で、本を読んだり、ホームレスの支援団体や子ども食堂のボランティアなどをしてきたことがあります。今回の受賞は、そういった自分が今まで考えてきたこと、してきたことを評価していただけたのかなと感じております。

私は優等生ではなかったので「こんな社会に誰がしたんだよ」と大人たちに詰め寄るような子どもでしたが、この論文『「もっと頑張れ」と大人たちは言うけれど』は、2050年には自分が「大人たち」になって、そのように言われる立場になるのだということを強く意識して書きました。

論文を書いたことはゴールや終わりではなくて、むしろこの論文を元にしてどのように社会にアプローチできるか、どのような社会を作っていけるかという始まりとして捉えるということが必要なのではないかと考えています。本日はこのような機会を与您いただき、誠にありがとうございました。

大学生の部 留学生特別賞

ようこそ2050年グリーンシティへ ～緑の天国一日体験ツアー～

呉 小優 さん

本日は、留学生特別賞を受賞させていただき、本当にありがとうございます。今回のコンテストのためにいろいろなアドバイスをくださった日本語学校の先生、たくさんのご意見をくださった審査員の方々に、心より感謝しております。

先月、最終審査会に進めたというお知らせをいただいた後、30分間手が震えていました。今まで日本語学校で書いた日本語の作文は500字以内のものだったので、今回のコンテストでその10倍の長さの小論文を書くのは、私にとって間違いなく大きな挑戦でした。今回のコンテストを通じて、現代社会の課題や未来について真剣に考えさせられ、本当に貴重な経験になりました。今の気持ちを忘れずに、今後も頑張っていきたいと思っています。本日は楽しかったです。ありがとうございました。



受賞者の言葉

高校生の部 大賞

「救うべくして救った命」

倉持 葵成 さん



このようなコンクールを開いていただき、本当にありがとうございます。そしてお忙しい中、プレゼンを見ていただいた審査員の方々、本当にありがとうございます。僕は今日、みなさんのさまざまな意見を聞くことができ、とても楽しかったなと思っています。そして、大賞をいただいたことに少し驚きを感じると共に、喜びも感じています。

僕たちは新型コロナウイルスの影響で日々が一変してしまい、当たり前だと思っていた日常がなくなっていました。さまざまな学校行事も制限され、正直言うと少し悲しいなと思っていました。でも、そんな中でも家族や地域の方々、先生方が温かく見守り、支えてくださいました。そして野村総合研究所の方々、今日この場に私たちが自由に意見を言う場を提供してくださいました。このようにさまざまな大人の方々の支えがあったおかげで、私たちは成長できたと思っています。ですから、次は私たちが恩返しをしていく番です。子どもが安心して過ごせる社会を作っていくためにも、次の世代の主役である私たちが協力し合っていきたいと思います。

最後になりますが、今回、私は小児医療にかかわる論文を書かせて頂きましたが、今この瞬間もさまざまな病気と闘っている子どもたちがあります。そのような子どもたちが一刻も早く笑顔になることを願っております。本日は本当にありがとうございました。





株式会社 野村総合研究所

〒100-0004 東京都千代田区大手町1-9-2
大手町フィナンシャルシティ グランキューブ